

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：84604

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2020

課題番号：18H05633・19K20839

研究課題名（和文）セット論・生産流通論からみた古代国家成立期の馬装体系の変化に関する研究

研究課題名（英文）A study on changes in the horse ornament system during the establishment of the ancient nation from the viewpoint of set theory and production distribution theory

研究代表者

片山 健太郎 (Katayama, Kentaro)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・アソシエイトフェロー

研究者番号：90526146

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000 円

研究成果の概要（和文）：古墳時代と古代の馬具研究の狭間にあり、十分に進んでいない7世紀後半を中心とする馬具について、特に金銅装の馬具と、セットをなす馬具の考古学的検討をおこなった。いわゆる毛彫馬具の棘付花弁形杏葉やそれとセットをなす飾金具について、文様による分類ではなく、製作技法を主眼に分類をおこなった。これにより、古墳時代から古代の金工製品の生産体制の変化の中で、装飾馬具の変化も位置づけることが可能となった。また、従来、7世紀前半段階に、古墳時代的な多様な装飾馬具の在り方から画一的なあり方へと変化するとされてきた。しかしながら、そのような単純な見方では、この段階の馬装体系の変化を理解するのは難しいことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、馬具を一つの材料として古墳時代から古代における金工生産をはじめとする手工業生産の変化を見通す視点が開かれた。従来から馬具工と造寺造仏にかかわる工人との関係については見通し的に示されてきたが、より資料に根ざして、当該期の手工業生産における馬具生産の位置づけを考えることが可能となった。また、研究代表者が古墳時代の馬具研究についてこれまでおこなってきた、新しい見方による馬具の分類編年研究、セットという視点の研究が当該期の馬具の理解においても有効であることを示した。

研究成果の概要（英文）：Research on harnesses between the Kofun period and ancient times had not been sufficiently advanced. In this study, I specifically studied harnesses with gold and bronze and their sets at that time. I tried to classify the so-called "hair carving harness" with barbed petal-shaped pendants and the decorative metal fittings that form a set with them not by the pattern but by the production technique based on the observations of the materials. This made it possible to position the change in the decorative harness itself in the change in the production system of ancient metalwork products from the Kofun period. It has been said that the various decorative harnesses of the Kofun period changed to a uniform and single style in the first half of the 7th century. However, this study with the observational analysis and classification of materials showed that it is difficult to interpret the change in the horse ornament system from such a simple point of view.

研究分野：考古学

キーワード：馬具 馬装 セット 生産・流通 金工 古墳時代 古代

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

7世紀は古墳時代から律令時代への変革期であり、『日本書紀』などの文献史料からも騎馬文化が重要な役割を果たしていた様子がうかがえる。このような時期にもかかわらず、6世紀までの馬具研究に比べて、体系的な研究はいまだなされていない。研究代表者はこれまで、金属や木材、漆などの有機質素材に注目することで、これらが複合的に用いられた馬具の生産と流通の実態について明らかにできる見通しを得た。しかし、毛彫馬具など主として7世紀代に盛行する馬具は積極的に取り上げてこなかった。本研究はこれらの課題や見通しを踏まえ、古代国家と装飾騎馬文化との関係を明らかにするものである。

2. 研究の目的

古墳時代と古代の馬具研究の峽間にあり、十分に進められてこなかった7世紀を中心とする馬具の生産、使用の実態を資料に即して明らかにする。それに基づき、研究代表者が馬装体系と呼ぶ、馬具の種類と組み合わせにより様々な社会関係を表示するシステムが当該期には存在したのか、存在したのであれば、前段階の馬装体系とどのように異なるのかを明らかにする。

また、飾馬や馬装体系の社会的機能は各馬具の生産と流通の問題と切り離せない。各馬具の型式学的分類と編年に基づき、セット関係の法則性の有無と脈略について明らかにすることで、間接的ではあるが、生産と流通の一端を明らかにする。

合わせて、当該期においては、馬具に認められる金属加工の技術や、馬具に用いられた文様が仏像などその他の器物と接点をもつことも多い。確実な馬具は出土していないが、奈良県飛鳥池遺跡などの工房の実態も明らかになりつつある。当時の器物生産の実態を馬具以外の資料と合わせて検証することで明らかにする。

3. 研究の方法

毛彫馬具に代表される7世紀の馬具について、毛彫馬具以外の馬具も含めて発掘調査報告書などをもとに悉皆的な資料集成をはかる。そのうえで7世紀代に盛行する毛彫馬具、金属製鑣轡、長方形鏡板轡、金属製輪鍔、金属製壺鍔、木心鉄板張壺鍔について分類案、編年案を作成する。加えて、編成される編年案について、須恵器や大刀の編年案との対比をはかり、7世紀代の馬具の統合編年を完成させる。この作業をもとに、馬具のセットの法則性の有無を明らかにする。法則性の有無にかかわらず、セット構成の背景について、生産や流通の視点から考察する。その際に重要になるのは、毛彫馬具にみる彫金技術やデザインである。これらが、他の金工品とどのようなかかわりをもつのかについて、金工技術を総合的に観察、比較することで明らかにする。また、飛鳥池遺跡などの同時期の金属や木材、有機質製品などを用いた複合素材手工業製品の生産遺跡のあり方を参考とし、これらにおいて馬具のみから考察した生産や流通のあり方と対比することで、当該期の馬具生産の実態を明らかにする。毛彫馬具は文様や金工技術から、百済に系譜を求められることもあるが、7世紀代に新たにみられるようになるこれら毛彫馬具、金属製鑣轡、長方形鏡板轡、金属製輪鍔、金属製壺鍔、木心鉄板張壺鍔の系譜については不明な点が多い。これらの系譜について、前段階から系譜の追えるもの、新たに出現するもの、8世紀以降にみられるものがセットの中でどのように現れるのかを明らかにする。朝鮮半島、中国の同時期前後の馬具とも対比しながら、7世紀の馬具の特質を解明する。

4. 研究成果

まず、毛彫馬具については、資料の集成にもとづいて、器種、型式分類をおこなった。従前から棘付花卉形杏葉と方形、円形飾金具については形態と彫金の文様による分類と編年がおこなわれてきた。これら毛彫文様の入った馬具は6世紀までの馬具と大きく異なり、鉄板を地板とせず、鍛造金銅製もしくは鋳造金銅製のいずれかの製作技法をとる。また、彫金による施文のタイミングとして、鍍金前と鍍金後の二系統があることに改めて注目した。

特に、製作技法として鍛造金銅製と鋳造金銅製が共存することは、これらの毛彫馬具と同時並存し、その後も継続する鍔帯金具の生産においても同様であり、古墳時代的な馬具の生産技術から、古代的な馬具、鍔帯などの金工製品への生産の在り方との共通性が示すことができる。

なお、これまで、飛鳥時代から藤原宮期における鍔帯の実態については不明であったため、勤務先所蔵の飛鳥・藤原地域出土の鍔帯金具とされる金具の整理をすすめた。飛鳥時代から藤原宮期にかけての時期にも鍔帯金具も出土しているが、これらのなかには馬具の鍔帯端部にとめられた金具なども含まれる。当該時期の鍔帯と馬具の帯金具の関係性(共通性、互換性)についてはこれからの課題であることが明らかになった。飛鳥・藤原地域出土の馬具・帯金具の資料については、今後刊行される『奈良文化財研究所紀要』に公表予定である。

つぎに、当該期の馬装体系にかかわる問題として、飾馬を特徴づける杏葉がある。当該期には、古墳時代的な多様な形態の鏡板轡・杏葉から、基本的には棘付花卉形杏葉に統一されるというのがこれまでの通有の見方であった。多くの棘付花卉形杏葉は確かに形態にはばらつきが少ない。一方、天理参考館B例のように、これらとは形態がやや異なるものがある。これとまとまりの強い一群との関係をどのように考えるかという問題があった。特に、天理参考館B例は出土地不明

資料であり、形態、吊金具の構造、彫金等の在り方から、本当に古墳出土資料なのかという問題があった。この位置づけを考えるうえで三重県志摩市塚穴古墳出土の花弁形杏葉は重要である。実見の結果、塚穴古墳出土例については、報告書では蛇尾の可能性が指摘されたが、幅の狭い一端には、裏面で同形の三角形の留金で繋の端部を挟み込み、3 鉾を通して貫通させることで、繋と連結する。先に挙げた天理参考館 B 例では、立間部は杏葉本体の金銅板を表裏 2 枚の別の金銅板で挟みこむ構造をとっており、この点で異なる。塚穴古墳例の杏葉先端部の穿孔がどのような機能のためのものかは不明であるが、全体の大きさ、形状、立間の構造からすれば、天理参考館 B 例が古相を示し、塚穴古墳例が新相を示す主系列とは異なる棘付花弁形杏葉の一系列として考えることが可能である。そして、塚穴古墳例には、方形孔一列の透孔を踏込舌にもつ鉄製壺鐙を伴うことから、飛鳥 に位置づけられる。とすれば、天理参考館 B 例は飛鳥 段階以前の棘付花弁形杏葉であると改めて位置づけることが可能である。いずれにしてもこれらの傍系的な棘付花弁形杏葉が主系列の花弁形杏葉とは別に存在することが明らかとなり、多様な複数系列の鏡板轡や杏葉が単一の主系列にとって代わるという単純な見方については資料に即した丁寧な説明が求められることとなった。

先に挙げた杏葉の在り方が複数系列から単一系列に収斂していくありかたは、文献史料から復元される社会統合のプロセスをなぞるような解釈につながっていたが、個々の資料に基づく生産や流通の在り方をもとに、馬装の同質性と異質性を理解する必要性の喚起へとつながった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 片山健太郎	4. 巻 第81集
2. 論文標題 古墳時代の障泥とその系譜	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 古文化談叢	6. 最初と最後の頁 79-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石橋茂登・片山健太郎・田村朋美	4. 巻 2020
2. 論文標題 飛鳥地域の出土の風鐸 第197-2次、大官大寺第3・5次	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 奈良文化財研究所紀要	6. 最初と最後の頁 122-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 片山健太郎	4. 巻 第23回
2. 論文標題 古墳時代中期の馬具編年 中期後半と中心として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中四国前方後円墳研究会第23回研究集会 中期古墳研究の現状と課題 ～副葬品による広域編年再考～ 発表要旨集・資料集成	6. 最初と最後の頁 9-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片山健太郎	4. 巻 第47号
2. 論文標題 古墳時代中期の馬具編年と中国四国地域の馬具	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中四研だより	6. 最初と最後の頁 6-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片山健太郎	4. 巻 2021
2. 論文標題 日高山1号墳出土の木心鉄板張輪鏝	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 奈良文化財研究所紀要	6. 最初と最後の頁 28-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 2件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 片山健太郎
2. 発表標題 古墳時代馬具の皮革素材
3. 学会等名 古代の馬研究会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 片山健太郎
2. 発表標題 古墳時代中期の馬具編年 中期後半を中心として
3. 学会等名 中四国前方後円墳研究会第23回研究集会 中期古墳研究の現状と課題 ~副葬品による広域編年再考~(招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 初村武寛・片山健太郎・金宇大・塚本敏夫・三好裕太郎	4. 発行年 2018年
2. 出版社 公益財団法人 元興寺文化財研究所	5. 総ページ数 125頁・図版68頁(113-121頁執筆)
3. 書名 『鏝情報に基づく戦後復興期消滅古墳副葬品配列の復元的研究』	

1. 著者名 諫早直人・森下章司・西村秀子・土屋隆史・奥田智子・前田俊雄・ルークエジントン=ブラウン・一瀬和夫・金宇大・片山健太郎・竹村亮仁・富山直人・佐々木憲一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ゴーランド・コレクション調査プロジェクト	5. 総ページ数 186頁・図版62頁(148-157頁執筆)
3. 書名 『鹿谷古墳の研究 ゴーランド調査古墳の研究2』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

鞍つくりから仏つくりへ https://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/2019/07/20190716.html
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------